

カモフラージュメイクは万能ではない - 顔に疾患のある当事者へのインタビュー調査から -

西 倉 実 季

お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科

【背景と目的】

本研究の目的は、顔に疾患のある女性へのインタビュー調査で得られたデータをもとに、疾患や外傷に施されるメイク(以下では「カムフラージュメイク」とする)の有効性と問題点を検討することである。

研究対象を顔に疾患をもつ当事者としたのは、次の理由による。筆者はこれまでの研究成果から、カムフラージュメイクが顔に疾患のある女性たちの自己意識に密接に関係しているという知見を得た。顔に疾患を抱える女性たちにとって、カムフラージュメイクはこれほど必要不可欠な存在であるにもかかわらず、従来的人文・社会科学領域での化粧研究においては、より美しくなるための化粧に焦点があてられ、疾患や外傷に施される化粧は考察の対象とされてこなかった。今日、化粧の役割がたんに「美」の提供にとどまらず、医療福祉的、社会心理的な領域に拡大していることを鑑みれば、疾患や外傷をもつ人々のカムフラージュメイクを研究の射程に入れることは重要な課題となってくる。

また、メイクアップアーティストや医療従事者が顔に疾患や外傷を抱える人々を援助する際は、とりわけカムフラージュメイクの有効性が強調され、その問題点は見すごされてきた。カムフラージュメイクを施したことによる成功例ばかりが取り上げられ、失敗した事例の報告や、それがなぜ失敗に終わったのかという検討はなされていない。こうした状況のなか、まずは顔に疾患や外傷のある当事者がどのようなことを考え、カムフラージュメイクに関してどのような経験をしているのかに着目することは、大きな意味をもっている。

【結果と考察】

カムフラージュメイクが、顔に疾患のある女性たちの日常生活においてきわめて重要な役割をはたしていることが改めて確認された。しかし一方、メイクをすることでかえって自分の顔の 異常さ を認識してしまう、 隠す ことに 後ろめたさ を感じてしまう、メイクが 強迫観念 になってしまうなどの問題点が見出された。

顔に疾患のある女性たちの語りから示唆されるのは、カムフラージュメイクがもつ意味の重層性である。それが有効であるか問題含みであるかは、一概に決まるものではない。それは、カムフラージュメイクを用いる個人を取り囲む状況や人間関

係に依存している。あるインタビュー対象者の「化粧の功罪」という言葉が示すように、カムフラージュメイクは本質的に両義性をはらむとさえ言える。さらに、ライフステージの移行にともない、カムフラージュメイクのもつ意味もまた刻々と変化していく。生物医学という専門家の「説明モデル」だけに依拠してしまうと、「カムフラージュメイク 患者のQOLの向上」といった一面的な見方に陥る可能性がある。なぜなら、カムフラージュメイクがもたらす問題点の多くは、心理的・社会的な悩みや日常生活上の困難であり、それらは生物医学モデルでは把握できないためである。非専門家的な「説明モデル」によって組み立てられた「病いの経験」をめぐる語りを理解しようとしめない限り、カムフラージュメイクが内包する意味の重層性や両義性をすくい上げることはできない。医療人類学者アーサー・クラインマンによって示唆された当事者の「病いの経験」に接近する意義を、ここで強調しておきたい。

近年、メイクアップアーティストや医療従事者により、顔に疾患・外傷のある人々への支援としてカムフラージュメイクが注目されている。日本の医療現場において、外見の問題が等閑視されてきたことを考えれば、これは評価しうる動向である。しかし、当事者の視点からみたときカムフラージュメイクはきわめて重層的な意味をもつことが示唆された今、メイクが決して万能ではないことを念頭に置きつつ、支援を行なっていく必要がある。いつ、いかなる状況で、どのようなライフステージにおいて、当事者はカムフラージュメイクにメリットあるいはデメリットを感じるのか。そうしたメリットはどのように増幅させていくことができるのか。またデメリットはどのように軽減することができるのか。当事者の「病いの経験」に積極的に目を向け、そこを起点に支援を構築していくことがコスメトロジーの実践のひとつであると考えられる。

注： 内はインタビュー・データからの引用であることを示す。